たのしさ、つながる、とやまの暮らし　　2019 秋冬号

とやま日季

特集：森田雄紀さん・さおりさん　今日の朝ごはん：早川純平さん・千穂さん　とやまで深呼吸：雨晴海岸
石井隆一富山県知事の明日のとやまを拓く：中西 進氏　とやま巡礼：真宗大谷派 城端別院 善徳寺　とやまの品：RetRe

蔵を、自分らしい美容院に変えて。

富山市 ｜ 森田雄紀さん（36） さおりさん（41）

今回ご紹介するのは森田雄紀さんと妻のさおりさん、そして、2人の子どもたちと2匹の犬。沖縄、愛知を経て、富山市の古民家に移住した。森林組合で林業に従事し、冬は除雪の仕事にも精を出す雄紀さんと、自宅の蔵を改装して完全予約制の美容院を営み、徐々に評判が広がっているさおりさん。自然豊かな場所で暮らす家族の思いや、日々の暮らしについて伺った。

暮らしを大切にできるお店がいい。

富山県東部、富山市片掛で暮らす森田さん夫妻。夫の雄紀さんは立山町出身、妻のさおりさんは愛知県出身で名古屋市内で美容師として約14年間働いていた経験がある。沖縄、愛知を経て2015年に富山市に移住。2人のお子さんにも恵まれ、子どもたちは近くの保育所に通っている。

さおりさんは、自宅の築100年ほどの蔵を改装し、2018年5月に完全予約制の美容院「髪と生活 MUUCHI(ムーチ)」をオープンした。片掛では45年振りのお店だ。改装は雄紀さんの友人の大工さんに依頼し、さおりさんの思いを生かした、窓からの眺めもいいおしゃれな店舗が完成。ムーチとは沖縄の方言で数字の6だとか。さおりさんは、顧客の暮らし方に寄り添った髪型の提案をして、自身も無理なく働きながら、多様な使い方ができるスペースにしたいと言う。いまでは富山県内各地や名古屋時代のお客さんも来店する評判のお店に。さおりさんの人柄やカット技術の高さ、無理なく維持できる髪型の提案も人気の秘密だ。

雄紀さんと結婚した当初は沖縄に住み、その後、愛知県内で自宅兼店舗にできる物件を探していたさおりさん。なかなか希望に合う家が見つからなかった。そこで、探す範囲を富山市内にも広げ、ネット検索で1軒目で見つけたのが現在の自宅。平屋とはいえ格安だった。下見は雄紀さんと義母に任せ、即決定。しかし、実際に来てみると、街から離れた山の中の集落で豪雪地帯であることを初めて知り、さおりさんは落ち込んだ。「泣きましたね。義母に、ここで暮らす自信がないと言ったら、『しばらくは子育て中心になるし、ここで一生住むと思わなくてもいいから、田舎でしかできないことを楽しむ気持ちで住んでみたら』と言われて、前向きな気持ちになれたんです」と振り返る。

もりたゆうき、さおり　夫の雄紀さんは立山町生まれで建設業に従事後、外の世界を見たいと22歳で沖縄に移住。飲食店で修行後、那覇で独立してコーヒー店を営んだ。店の客として来店したのが、さおりさんだ。さおりさんは、愛知県出身で名古屋で美容師として勤務。高い技術を持ち、十分な収入があった。しかし、仕事中心で消費するばかりの生活に疑問を抱き「人生の方向を180度変えてみよう」と退職。沖縄を旅するなかで、雄紀さんが営むコーヒー店に客として訪れて出会った。2人は結婚して那覇で暮らしたのち、さおりさんの実家を経て、2015年に富山に移住。

髪と生活 MUUCHI　富山市片掛2015　TEL：080-4071-4578　https://kamitoseikatsu.tumblr.com

生きる力がつく、自然のなかの子育て。

実際に住んでみると、平家の自宅は築約45年、古民家と言っても、とても綺麗に使われていた家だった。純和風の部屋の一部は、雄紀さんがフローリングに張り替え、壁には漆喰を塗ったり、薪ストーブも設置するなどして明るくリノベーションできた。豪雪地帯で冬場は確かに雪が多いが、家の周辺の除雪は雄紀さんや近所の方が協力し、一般道路も除雪が行き届いている。スーパーも車で15分ほどのところにある。「保育所は待機児童も全くなくて、子育て環境としては本当にいいところ。もっと、移住者を増やしたいと思っているんですよ」と、さおりさんは話す。

子どもたちのために、できるだけ添加物の少ない食事やおやつを手作りするようになったさおりさん。「食については、これまで暮らした名古屋、沖縄、富山の料理をミックスしたメニューになっています。子どもと味噌作りをしたり、昆布締めの作り方も習いました。夫は狩猟の免許を取ったので、イノシシなどの肉を調理することもあります。家の周りにはミョウガも生えていますし、春には山菜採りに行ったり、小さいですが家庭菜園も作ったりして生活する力がついてきました。自然に囲まれた環境もあり、何があっても生き伸びていけると思えるようになりましたね」

最近では移住者のイベントに協力して、漆喰塗り体験の場所を提供し、ほかの移住者と交流を深めた森田さん家族。雄紀さんは、那覇は富山よりもかなり都会で、四季の変化にも富んだ富山の良さがはじめて分かったという。現在は消防団に所属し、地域にも貢献する。「若い世代がきて、地元の方に温かく迎えてもらったこともありがたいですし、人とのつながりが一番感じられるのが田舎の良さだと思います。何より、自然とともにある暮らしがいいと思うんです」

《富山の達人たちのとっておきの朝》

今日の朝ごはん

富山市・早川純平さん、千穂さん

すっきりとした室内。テーブルに料理が並べられていく。器のいくつかは、県内作家によるもの。箸置きは、氷見の海岸で見つけた石だ。

富山市の早川純平さん、千穂さん夫妻が暮らすのは、2人が営む洋菓子店と一体になった家。5時半に起床し、7時には店に出る。これでも、「この業界では遅い方」とのこと。店のスタッフを含め、「仕事もプライベートも大切にできるように」という思いで、拘束時間をなるべく短くしているのだそうだ。

とはいえ、営業日は2人とも忙しい。朝食は、お気に入りのパン屋の自家製天然酵母を使ったトーストなど。落ち着いて食事ができるのは、定休日など限られた日だけだ。だからこそ、休日にはいつもより少し手間暇をかけて準備をし、朝食の時間を楽しむ。

料理は主に千穂さんが担当。この朝のメニューは、砺波市特産の大門素麺を使ったにゅうめんと、だし巻き卵、自家製のぬか漬け。それに、千穂さんが好きなえごまを使用した料理が2品並んだ。えごまの葉のおにぎりは、しょうゆ、みりん、ごま油に漬けこんだ富山県産えごまの葉で、ご飯を包んだもの。ほうれん草は、えごまと金ごまで和え物に。ごまだけで和えるよりも、コクのある味わいになるという。

食材の多くは直売所で買い求め、調味料も質の良いものを選ぶ。「食に関わる仕事をしている以上、ふだんから繊細な味に触れていたい」と、夫妻は口をそろえる。日常生活のなかで出会った味や食材が、お菓子作りのヒントにもなることも少なくないという。夫妻の暮らしは、この2人にしか作れないお菓子を生み出す土壌といえるかもしれない。

今朝のメニュー：大門素麺のにゅうめん、薬味はとろろ昆布、かいわれ大根、ゆず／県内産の平飼い卵を使っただし巻き卵／富山県産えごまの葉のおにぎり／ほうれん草のえごま・金ごま和え／きゅうりとにんじんのぬか漬け／静岡県産の緑茶

はやかわじゅんぺい、ちほ　富山市内で、洋菓子店「パティスリー　エフテレット」を営む早川さんご夫妻。純平さんは富山県出身、千穂さんは静岡県出身。東京・自由が丘の「モンサンクレール」での修行時代に出会い、2016年に「エフテレット」をオープンした。純平さんは調理を担当し、千穂さんはおもに接客を担う。仕事のうえで大切にしているのは、丁寧であること。お菓子作りはもちろん、お客さんとのコミュニケーションや道具の扱いにいたるまで、気持ちを込めて行うように心がけている。

大伴家持を魅了した、うるわしき立山。

◎雨晴海岸

富山湾越しに立山連峰から朝日が昇る、雨晴（あまはらし）海岸の絶景。晩秋から冬にかけて、とても寒い朝には、気嵐（けあらし）と呼ばれ、気温よりも高い海水が蒸気となり海面を漂う幻想的な光景があらわれる。

すぐそばの高岡市伏木は、奈良時代には越中の国府が置かれ、大伴家持が国守として5年間赴任した地。家持は都から離れて越中で暮らすなかで、その豊かな自然と美しい風景に心を動かされ、優れた歌をいくつも詠んだ。のちに万葉集に収められた家持の歌の４７３首のうち、越中で詠んだ歌は実に２２３首。なかでも立山の神々しい眺めに心動かされた家持は、次のような歌を詠んでいる。

立山に　降り置ける雪を　常夏に
見れども飽かず　神からならし

巻17・４００１

富山湾は「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟しており、雨晴海岸付近は渋谷の崎として、家持も歌に詠んだ景勝地。よく晴れた日には富山湾越しの立山連峰が望めるほか、道の駅「雨晴」からの眺めも爽快。海岸線を走るJR氷見線の観光列車「べるもんた」には、すし職人が乗車し、富山湾鮨や地酒とともに絶景を満喫できる。雨晴海岸の名前の由来になった義経伝説が残る「義経岩」もある。

㉑道の駅「雨晴」
高岡市太田24-74　TEL：0766-53-5661
JR氷見線雨晴駅から雨晴海岸まで徒歩5分
https://michinoeki-amaharashi.jp

石井隆一富山県知事の 明日のとやまを拓く

ゲスト
高志の国文学館 館長
中西 進氏

多彩なゲストと、これからの富山について対談。高志の国文学館や元号「令和」について、中西進館長と語り合いました。

高志の国文学館の来館者数 7年間で85万人を達成

石井　中西先生とのご縁は、私が２０１０年春、東京・丸の内の書店で、偶々、先生の『日本の文化構造』という本を読み大変感動したことから始まります。このような素晴らしい本を書く方に、ぜひ、お会いしたいと、平城遷都１３００年祭の折に奈良県立万葉文化館にお訪ねし、万葉集はもとより日本文化、中国をはじめアジア、欧州の文化などについての先生のご造詣の深さに感服し、かつ楽しい時間を過ごさせていただきました。

その頃、富山県では旧知事公館を廃して、高志(こし)の国文学館を建設する計画を進めていました。辺見じゅん先生が初代館長の就任を快く引き受けてくださったのですが、その際の辺見先生のご希望もあり、中西先生に同文学館のアドバイザーへのご就任をお受けいただきました。

その後、辺見先生が館長就任前に突然、亡くなられまして、一時、途方に暮れたのですが、熟慮の上、中西先生に初代館長を引き受けていただけないかとお願いしたところ、快くお受けいただき、感謝いたしております。この文学館を設けたいと思った根底には、グローバル化などが進展するなかで、次の時代を担う子どもたちが根無し草のようになることなく、故郷に誇りや愛着を持ち、心の根っこを富山県、越国(こしのくに)に置きながら、健やかに、たくましく育ち、県内はもとより、全国、世界に羽ばたくような人材になって欲しいという願いがあります。同時に大伴家持、棟方志功、角川源義、浅野総一郎、安田善次郎、高峰譲吉など、日本の文化や経済を担い、国際的にも活躍したふるさとの優れた先達、偉人を顕彰する場にしたいという思いもありました。

先生にはお忙しいなか毎週のように来ていただき、館長として企画運営の陣頭指揮をとり、要所要所を見て丁寧にご尽力いただいています。２０１２年７月のスタート時は世田谷文学館をお手本の一つとしていましたが、お陰で、来館者数は同館の2倍近いペースで、２０１９年９月には85万人を突破しました。スタッフも頑張ってくれていますが、これはやはり、中西先生のリーダーシップによる点が大きいと感謝しています。高志の国文学館の企画や運営の面で感じておられること、課題などをお聞かせいただければと思います。

人間の幸せは、芸術文化を愛する心から

中西　県政における文学館というものの意義を考えますと、大きく言えば、一にも二にも、すべての人間の幸せは、芸術を愛する心からということ。心の福祉が一番大事で、生活や経済の中に最終の福祉はないのだということを常に言っております。拝命いたしてからあとも、文化は、他に代え難い福祉だということは、ずっと考えております。

３年後、館は10周年を迎えますが、７年間はそういうつもりでまいりました。来場者数が世田谷文学館を越すようなハイスピードで来ていることも、大変コンセプトが難しい文学館という危惧をはね返して、成功しているんだなと思いました。

少しでも周辺の人たちに支えられ、地域力の上に文学館が成り立つのだという事業を実現するためには、日常的な行動、心がけが、地域と結びついていなければいけないということは、ずっと思っております。地域の人たちが心を寄せてくれることで、文化力のリーダーシップを握っていければいいと思ってまいりました。それが幸い、成功したのではないかと思っておりまして。知事のご指導のもと、今日まで来たように思います。

両陛下もご覧になった漫画の展示

石井　この文学館はいわゆる純文学、小説や詩歌、短歌も大事にしながら、漫画やアニメ、映像も対象にしています。良い企画や展示を行っても、まず、ご来館いただき、それに触れてもらわないと始まらないという面があります。そこで、できるだけ多くの方に来ていただけるよう、子どもたちや親子でくつろげるような、冬には床暖房のある部屋もあらかじめつくりました。

先生には非常に幅広く、柔軟に文学館の運営を考えていただいております。初回は大伴家持をテーマにした開館記念の企画展を開催し、大変多くのご来館をいただきました。その後は、例えば、『おおかみこどもの雨と雪』や、

（左から）中西氏、石井知事

『まんが家　藤子・F・不二雄の「SF（すこし・ふしぎ）」』などは、子どもや大人も多数ご来館いただき、それをきっかけに高志の国文学館という存在を身近に感じて、純文学や詩歌の企画展も見に来ていただいているようにも思います。また、中西先生のような、みんなから尊敬される求心力のある館長さんがいらっしゃるお陰でもあります。

中西　いえ、館も自発的な体質ができたということだと思いますね。漫画に関しましては、２０１７年に天皇皇后両陛下（当時）をご案内しましたとき、館の奥の方へ行ったら皇后様が、「あら、漫画がある」とおっしゃいました。ですから、漫画というと子どもという方程式は、もう成り立たず、老若男女を問わず対象になっていますね。漫画や絵は視覚的ですから、直感的に体に入ってまいります。文字だけではない、もっと有力な思想とか事実の伝達媒体として、絵があるのだと感じるようになりました。最初の家持展を除きますと、8年目になっても一日当たりの観覧者数のトップは、『おおかみこどもの雨と雪』の展示です。アニメをもうちょっと扱ったらどうかという議論が出るぐらいで、そこからスタートしたのは非常にいいことだと思います。

子どもたちに万葉の心を伝えて

石井　先生は、万葉集や国文学の泰斗でいらっしゃるだけではなく、「万葉みらい塾」と銘打って全国47都道府県の小・中学校を回られ、次の時代を担う子どもたちに万葉の魅力や心を伝えてこられました。

　そのこともあり、菊池寛賞も受賞されましたね。先生ほどの大家が日本全体を行脚されて、次の時代を担う子どもたちに万葉の心、精神を伝えようとされている、その情熱、お志に本当に感動いたします。また、そういう先生のお心持ち、姿勢があるから、この文学館に若い人も惹きつけてこられたのかなと思います。

中西　子どもは本当に素晴らしいということを、常に体験し続けてきました。万葉集で難解中の難解な事柄があります。例えば、額田王が、秋になったら全部、紅葉をしない。それが、うらめしい。だから春より秋がいいと言うんですよ。うらめしいと思う方がいいという、これが分かるかと、子どもに言うんです。

　ところが子どもは、「全部真っ赤だったら怖い」、葉っぱだって個人差があると言う。もう、びっくりしましてね。「みんな同じ服装してる？」と言ったらバラバラで、「紅葉もそうだよね」、なんて言うのを楽しんでいると、こども塾が成り立つんですね。ごく自然体でものに接する善意の導きといったものがある。だからむかし小学校の先生を訓導といったのはすばらしいと思いますね。

大伴家持文学賞の創設

石井　２０１８年が大伴家持の生誕１３００年になりますので、記念企画展を3年位かけて実施できないかと先生にご相談しました。他方で、この機会に大伴家持文学賞を創設してはどうかとの先生のご提案をいただきました。さすが、先生のご発想だと思ったのは、対象を国内だけでなく、世界の詩人から選びたいとおっしゃったことです。それなら、第１回目の受賞者にどなたが選ばれるかが極めて重要と考え、北欧、西欧、米州、アジアなどの文学に通じていらっしゃる6名の審査員も選定していただいた。２０１８年の第１回目の大伴家持文学賞の受賞者はマイケル・ロングリーさんで、北アイルランドに本拠を置く世

界的な詩人です。この文学賞についてのお考えを改めてお伺いします。

中西　私は富山県をもっと、輝かしい県にするために、高いものを目指したいと思いました。国際化の時代ですから、賞をつくるのであれば、脅かす相手としては、ノーベル文学賞しかない。そのなかでも詩が文章の極致であり、詩人を顕彰しようと。幸いなことに、ノーベル文学賞を受賞したシェイマス・ヒーニーの親友であり、ハイティーンの時代から同じように詩集を出していたのがマイケル・ロングリーさんでした。識者はみんな、マイケル・ロングリーさんを認識してるんですね。この賞の発信をしたのですから、富山県は一挙に世界県になるはずです。

石井　マイケル・ロングリーご夫妻には授賞式とご講演の際に初めてお会いし、素晴らしい方だと感銘を受けました。せっかくの機会ですので、県内の家持ゆかりの自然景勝地や歴史的、文化的な名所などをスタッフに案内してもらいました。すると、すごく印象深かったとお手紙をいただき、後日、詩を3作書いてご送付いただきました。それを拝読すると、大伴家持文学賞を授賞されたことを契機に、1300年の時空を超えて日本の大伴家持と北アイルランドのマイケル・ロングリーさんが、同じ詩人、歌人としての心、魂の交流をされたように感じます。時空を超えて、詩人の心、才能が響き合い、マイケル・ロングリーさんの新たな創作活動の展開につながるといったことになれば素晴らしいことですね。

中西　そうですね。この機会に、もっと、富山県がアイルランドと交流を持ったらどうでしょう。

石井　確かに、そうした方向も考えられますね。

「令和」に込められた思い

石井　この5月から新元号「令和」になりましたが、先生は考案者とはお認めになられませんけれども、令和に込められた思いを改めて伺いたいと思います。

中西　お陰様で同姓同名のよしみを持って、中西がいろいろ解説をしないといけない機会を与えられまして本当にうれしく思います。あの「令」という字は、命令の令だと言う人がいますが、辞書ではそのような順序では書いていませんね。まず、『説文解字』という中国で一番古い辞書にも「令は善なり」と書いてあります。いいことだから、何々してもらうという命令の意味を含み、命令の最たるものは、自らへの命令で、自律ですね。それは、日本語の「うるわしい」に相当します。うるわしいというのは、整然とした美しさのことを言います。自らを律して端正である。きちんと整っている美。そういうことを元号として掲げることは、非常に歴史的に合っていると思うんですね。

　一方、「和」は十七条の憲法です。十七条の憲法の基本は、争わないことです。なぜ争うのかと言ったら、人間は怒るからだと言う。怒るのは、俺だけが正しくて、みんなは正しくないと思っているからです。戦争の原因は、平等ではないと考えた瞬間に起こる。きちんとした平和を成り立たせていくものは抽象概念ではなくて、みんな平等な人間だという認識です。これが和です。令は、うるわしく自らを律すること。和は平等の精神。みんなが一緒だということです。

　さらに、日本をうるわしいという言葉で形容したのが、ヤマトタケルノミコトで、「倭(やまと)は　国の真秀(まほ)ろば　たたなづく　青垣(あおかき)　山籠(やまごも)れる　倭(やまと)し　麗(うるは)し」という望郷の歌を詠みました。大和はうるわしいと。きちんと整った美しさ。山川があってうるわしいというのは、富山県にそっくりですね。

石井　ありがとうございます。

中西　本当に、美しい自然を持っていて、うるわしい国が日本です。元号について、明治時代をからかった歌があります。明治とは、上から読めば明治だよ。つまり、上の目線で言うと、明らかに治っていると言うけども、下から読めば、民衆から考えると、「治めるめえ(明)」と、江戸弁です。それで言うと令和とは、上から読めば令和だが、下から読めば「やまとし　うるわし」になるんですね。この、「うるわしきやまと」を実現することを、スローガンとして掲げよう、という風に考案者は思っているのだと思います。

石井　令和は、家持の父、大伴旅人が大宰府で催した梅花の宴の序文からとられたとのことです。その頃、家持は確か13歳で、先生のご著書によると、家持は宴の場には出席

していないが大宰府にはいた。その2年後、家持15歳の時、「うち霧(き)らし　雪は降りつつ　しかすがに　吾家(わぎへ)の園に　鶯鳴くも」と詠っています。歌人としての処女作ですが、先生のお話では、これは旅人が梅花の宴で詠った「わが園(その)に　梅の花散る　ひさかたの　天(あめ)より雪の　流れ来(く)るかも」という名歌を懐かしみ、かつ前年に死去した旅人を追慕した歌だとされています。また、家持は越中国守として在任中、33歳のときに「追ひて筑紫(つくし)の大宰の時の春の苑(その)の梅の花に和(こた)へたる一首」として、「春の裏(うち)の楽しき終(をへ)は　梅の花　手折(たを)り招(を)きつつ　遊ぶにあるべし」と詠っていますから、越中の人にとってもゆかりのある歌ですね。

中西　そうですね。梅花への尊重。それを雪に例えるというような、季節を超えた存在と認識すること。それでいて雪や梅は、美しい絶対性をもっていることは、ずっと、今日までつづいている。その流れの根幹にあるものが梅花の三十二首ですね。家持は旅人にとっては晩年の子で、かわいがられて育ち、当然、その流れの中にあります。梅花の宴の呼びかけは、中国の古典に遡った知識の中から出てきた発言で、それをもとに日本的にアレンジしている。期せずして日本の美意識の、あるいは倫理観とさえ言っていいような、自然の法則を、おのずからに考える日本人の原点がそこにありました。

　そして、家持の業績の中に、雪月花を詠むものがあります。これは、中国ではやや遅れて白楽天が詠んでいる。白楽天の前に、なぜ、そんなことができたかというと、そのルーツが梅花の宴にある。ですから、この元号の一端に、家持がいると言ってもいいですね。お父さんがつくったものを受け取って、大宰府体験がもとになって、その身体を越中に運んできているのです。都ではダメなんですね。大宰府という、都以外のところで作り上げられた体格というようなものを、後にあれと一緒だなと思ったのが越中で、そこから歌が始まっています。越中へ来て自然を歌の対象にしたのですが、都ではそういう風にはならない。そこから、日本の詩歌は流れてきていますからね。

石井　今のお話は感動的ですね。大宰府という日本の地方で、梅花を雪に例える、季節を超える存在として認識するという新しい発想が出てきた。家持もずっと、都にいたら、さらなる展開はなかった。越中という地方に出て、雄大で美しい自然に触れ、雪月花を詠むといった新しい美意識が花開いていった。これはまさに、地方創生、地方の文化振興の大先達ですね。

中西　そうです。地方は都の鏡。地方から見ると都の人間というのが映り、相対化できるわけですね。

ローカルをグローバルに

石井　今後の高志の国文学館の目指すべき方向について、お考えをお聞かせいただけますか。

中西　郷土の先人たちを顕彰するにあたり、現代のニーズに合ったような存在の示し方が大きな課題です。県に密着しながら、どう世界的に開かれた館にするか。相矛盾しながら一体であるべきものは、崇高な唯一の使命であり、切り口は模索中です。ローカリズムをグローバリズムにすることが大きな課題ですね。

石井　高志の国文学館が3年後に開館10周年を迎えます。お話のように、富山県や高志(越)の国ゆかりの先人の顕彰などにも取り組みながら、視野を世界に広げて、富山が文学や文化を通じて世界とつながっていくという方向も大切ですね。先生のお知恵をいただきながら、文学館の新しい可能性を求めていきたい。県民一人ひとりが輝いて生きられる「元気とやま」の創造のためには、経済の活性化のみでなく、文化力の磨き上げが大切です。今後ともよろしくお願いいたします。

中西　こちらこそ、よろしくお願いいたします。

中西 進　なかにしすすむ

アジア文化と「万葉集」の比較研究で知られ、04年文化功労者、13年文化勲章受章。ほかに日本学士院賞、菊池寛賞、大佛次郎賞、読売文学賞、北日本新聞文化賞など。94年歌会始召人。国際日本文化研究センター教授、大阪女子大学学長、プリンストン大学客員教授などを歴任。著書に「中西進万葉論集（全8巻）」、「中西進著作集（全36巻）」ほか。

石井隆一　いしいたかかず

富山県知事。東京大学法学部卒。石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、自治省財政担当審議官、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。04年より現職。03年から06年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に「『元気とやま塾』入門」「分権型社会の創造」「地方分権時代の自治体と防災・危機管理」など。

加賀藩の庇護を受け、越中国の真宗寺院において勝興寺（高岡市）と肩を並べる地位を極めた。一段高く施工された床や格天井など武家の特色を示す「大納言の間」からは、前田家への配慮がうかがえる。また、昭和23年には、民藝運動の提唱者・柳宗悦が70日間逗留して、集大成となる美思想「美の法門」を書き上げた。その舞台となった「お広敷の間」もある。

南砺市城端405　http://www.zentokuji.jp

写真：左上より時計回りに、本堂、大納言の間、お広敷の間、庭園

とやま巡礼

真宗大谷派　城端別院　善徳寺

街のなかにある善徳寺は、地域の人々との心の距離も近い。

人々の暮らしに潤いを与え、伝統文化を伝える南砺市・城端の街。その大通りから少し奥まったところにある城端別院善徳寺は、浄土真宗を広めるために本山の分身として１４７１年に建立された。開基は本願寺第八代蓮如上人である。室町時代後期より真宗信仰の拠点として存在を示し、江戸時代には加賀藩の手厚い保護を受け、越中国の真宗寺院の触頭役（ふれがしらやく）を務めた。藩の法律を伝えるとともに、本山からの指令を広める重要な役割である。そのため、前田利長公が鷹狩の際に宿泊したといわれる「大納言の間」や、13代藩主の10男を住職として迎えた「御殿」など、前田家との関わりを今に伝える部屋が多い。

再建以来２６０年間一度も火災に遭わず、令和の今も堂々とたたずむ本堂は、地元の大工によるものだ。その本堂では、３６５日欠かすことなく朝と昼のお勤めと法話が行われている。毎日継続している寺院は全国的に稀だが、城端には毎朝参加している常連の人がいるという。いにしえから今もなお地元の人たちとのふれあいがあるのは、信仰心はもとより、街との近さも関係しているのかもしれない。

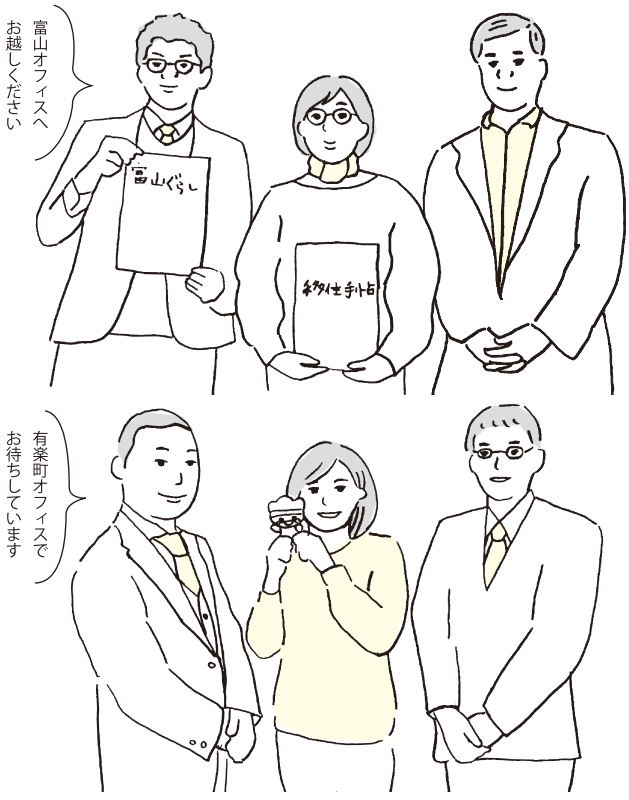
とやま暮らしのことなら、富山くらし・しごと支援センターへ。

とやま暮らしに関するご相談、移住支援制度のご案内、富山県内での現地案内のほか、仕事面も、経験豊富なキャリアカウンセラーが、就職面談、面接指導なども含め、就職決定までしっかりサポートします。また、移住者の生の声が聴けるセミナーも開催しています。

富山オフィスと有楽町、大手町、大阪オフィスが相互に連携し、暮らしと仕事の一元的な相談に対応しています。

とやま暮らしがいいなと思ったら、富山くらし・しごと支援センターへお気軽にご相談ください。

㊐富山くらし・しごと支援センター　◎有楽町オフィス（東京・有楽町／東京交通会館内）くらし TEL：080-8870-2456　しごと TEL：070-2798-7878　◎大手町オフィス（東京・大手町／パソナグループ本部ビル内）　くらし TEL：080-4157-0578　しごと TEL：0120-108-250　◎大阪オフィス（大阪・道修町／（株）パソナ大阪内）　TEL：06-7636-6065　◎富山オフィス（富山市／とやま自遊館 2F）　くらし・しごと TEL：076-411-9179
「くらしたい国、富山」ウェブサイト　https://toyama-teiju.jp



東京23区にお住まいなら、「移住支援金制度」をご活用ください。

東京23区（在住者又は通勤者）から富山県内に移住し、対象法人に就業した方に移住支援金を支給する制度が、今年度から始まりました。東京圏への一極集中の是正や地方の中小企業等における人手不足の解消を目的としています。

富山県へのUターン就職を希望の人をサポートする、求職者と企業のマッチングサイトでも様々な情報を発信。

東京23区からの移住をご検討の方は、ぜひ、ご確認ください。また、ご親族やお知り合いの方で、富山への移住を検討している方にも、ぜひお伝えください。

＜移住支援金＞　世帯：100万円、単身：60万円　※起業支援金 +200万円
＜対象者の主な要件＞　1. 東京23 区の在住者又は通勤者（直近５年以上）　2. 富山県内への移住者　3. 移住支援金の対象求人に新規就業した方
＜申請手続きの流れ＞　1. とやまUターンガイドの求人情報をチェック　2. 対象法人へ就職活動　3. 就業　4. 移住先市町村へ移住支援金の申請手続き（就業3か月以上経過後）
詳細は、下記へお問い合わせいただくか、ウェブサイトをご覧ください。

㊐富山県総合政策局移住・UIJターン促進課　TEL：076-444-4117　FAX：076-444-8694

富山県移住・定住促進サイト　くらしたい国、富山
https://toyama-teiju.jp

Uターン就職希望者と企業とのマッチングサイト　とやまUターンガイド
https://uturn.pref.toyama.lg.jp

とやま日季　2019 秋冬号　2019年11月発行　発行：富山県総合政策局地域振興・中山間対策室 〒930-8501 富山市新総曲輪1-7 TEL. 076-444-9605 FAX. 076-444-4561
企画・編集・進行管理：北陸博報堂　取材・文：タダカツ、吉川悠太、上坂真紀、他　写真：室澤敏晴、他　デザイン：宮田裕美詠、柿本萌　印刷：とうざわ印刷工芸

富山県

「自然とともに暮らす」を、かなえる道具。

RetRe

RetRe（リツリ）は、虫喰いのナラ材を使ったブランド。粘菌によってできた「墨流し杢（すみながしもく）」と呼ばれる唯一無二の模様には、独特の風合いと美しさがある。海外では「スポルテッドウッド」として人気が高い材料だ。日本では山に放置されたり、ほとんど使われることがなかった材料に尾山製材の代表、尾山嘉彦さんが着目し、デザイナーの山崎義樹さんとブランドを立ち上げた。富山産や国産の広葉樹の魅力を多くの人に伝え、里山再生をはかり、木にかかわる人々の未来のためにと思いを込める。心を豊かにする暮らしの道具として注目を集めるほか、尾山製材では虫喰いのナラ材そのものを、テーブルの天板や床材としても提供している。

RetReでは毎年、新作を発表しており、最近では重厚感のあるブックエンドが人気。そのほか、時計、花器、スティック＆ボール、ミラー、カトラリーレスト、フォトフレームなど多彩な商品が揃う。富山県産の天然の虫喰いナラ材を中心に使用するため、同じ花器でも一つひとつの模様が違うのが大きな魅力。虫喰いや粘菌などの自然の営みは、ゆったりとした時の経過と不思議な安心感をあたえてくれる。いずれも、尾山製材のオリジナルブランド「みつろうクリーム」で仕上げられている。尾山さんは、「富山の木を活かすことで、人を育てられたら」と語る。

㈱尾山製材株式会社　下新川郡朝日町道下708　TEL：0765-83-2220
企業サイト　http://www.oyamaseizai.com
ブランドサイト　https://www.retre.jp